

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 4 1 号

平成 1 7 年 9 月 2 0 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

スポルジョン「朝ごとに」より（2）

2 月 1 1 日

彼らがイエスと共にいたものであることを認め、...

（使徒行伝 4・13）

クリスチャンは、イエス・キリストに酷似していなければならぬ。...私たちはキリストの写真であり、キリストの生き写しでなければならぬ。この世の人々が私たちを長い間見つめて「どこか似ているような気がする」というくらいではなくて、一目見るや「彼はイエスと共にあり、イエスに教えられ、イエスのようであり、ナザレの聖者の思想を受け、その生涯の行動のうちにそれを実行している」と言うのでなければならない。

クリスチャンはその大胆さにおいて、キリストのようであればならぬ。あなたの宗教を恥じてはならぬ。あなたの信仰は決してあなたを恥じ入らせない。あなたが信仰をはずかしめないように注意せよ。

イエスのごとく、あなたの神に勇敢であれ。愛の精神においてキリストに似た者となれ。ねんごろに考え、親切に語り、親切に行動せよ。人々があなたについて「彼はイエスと共にいた」と言うためである。聖潔において、イエスに似た者となれ。イエスは御父のためにはいかに熱心であられたか。

あなたも常に善を励め、時を空費するな。時は貴重である。イエスはどれほど克己され、自己の利益を求められなかったか。あなたもそのようにせよ。イエスがいかに信仰深くあられたか。あなたも祈りにおいて熱心であれ。イエスは父のみこころにどのように従われたか。あなたも自らを主にゆだねよ。

いかにイエスは忍耐強くあられたか。あなたも忍耐を学べ。その中でもイエスのきわだった特徴である敵をゆるすことを学べ。「父よ、彼らをお許してください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」というイエスの御言葉を常に耳底にとめよ。あなたがゆるしを求めるようにあなたもゆるせ。敵に親切をつくすことにより燃える炭火を敵の頭に積み。悪に報いるに善をもってせよ。あなたも神のように完全となり、方法と手段を尽くして、「イエスと共にいた」と言われるようになれ。

2月12日

それは、キリストの苦難が私たちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである。(第2コリント 1・5)

わたしたちの最も落胆しているときこそ、聖霊の慰めによって高められるということは、なんと祝福であろう。その理由の一つは、試み自体が慰めを入れる余地を多く造ることである。偉大な心は大いなる悩みによってのみ造られ、悩みのくわは慰めの溜池を深く掘り下げて、さらに多くの慰めがたたえられる余地を造る。神が私たちの心に来られ、それが一杯であるのを見られると、私たちの慰めを砕いてそれを空にされ、恵を入れる余地を造られる。人は謙そんになればなるほど多くの慰めを受ける。なぜなら慰めを受けるに適した状態となるからである。私たちが悩みの中にいて最も幸福である今ひとつの理由は、私たちが神と親しく相談を始めることである。

倉が満ちている時には人は神なしに生活し、財布が金ではちきれそうなときには祈りなしに暮らそうとする。しかしヨナのように一度私たちのとうごま(ひさご)が取り去られると、私たちは神を必要とする。家の中から偶像が取り去られると、私たちは神をあがめざるを得なくなる。

「主よ、私は深い淵からあなたに呼ばれる。」谷底から来る叫び声ほど聞こえやすいものはないように、深い試みと苦悩にある魂の奥底から来る祈りほど強いものはない。それが私たちを神のみもとに伴って行き、私たちを幸福にする。なぜなら神に近くある事は幸福だからである。

悩める信者よ来たれ、あなたの重荷のためにいらだってはならない。なぜならそれは深いあわれみの来る先ぶれだからである。

2月14日

彼は一生の間、たえず日々の分を主から賜って、その食物とした。

(列王記下 25・30)

実際に人々に必要なものは、その日その日の分である。私たちは明日の分を必要としない。明日の分は明日の朝が来ない限り必要ではないからである。6月にのどがかわくのを2月に満たす必要はない。私たちは2月には渴きをおぼえないからである。もし私たちが日毎の必要に欠けることがないなら、何の不足もないはずである。一日に足りる分が私たちが実際に用いる全部である。衣食にも私たちは一日分より多く用いることができない。余分があると貯える手間と盗人の番をする心配が伴う。一本の枝は旅人を助けるが、何本もかかえて行くのは苦勞である。ご馳走でも満足するまでがよいのであって、どんな大食漢もそれ以上食べるとかえってまずくなる。これが私たちの期待すべきすべてである。これ以上欲ばるのは恩知らずである。私たちの天の父がそれ以上与えられない時、私たちは一日の分を持って満足していなければならない。…

愛する主にある友よ、あなたの恵みはその日その日に必要なものである。あなたは力を余分にたくわえておくには及ばない。あなたは日ごとに上よりの助けを求めなければならないのである。日々の分があなたのために準備されているということは、なんと安心なことだろう。

あなたは伝道において、黙想において、祈りにおいて、また主を待つことにおいていつも新しい力を受けるのである。あなたに必要なものはすべてイエスの中に備えられている。だから、それをたえず主からいただくように。日ごとの恵みのパンが、あわれみの食卓にならべられているのに、空腹をかかえて過ごすようなことをしてはならぬ。

2月15日

栄光が、今も、また永遠の日に至るまでも、主にあるように。(第

2ペテロ 3・18)

今あなたは主の栄光を現しているか。使徒は、「栄光が今も、また永遠の日に至るまでも主にあるように」と言っている。今日あなたはこのことを祈らないか。

「主よ、私を助けてあなたをあがめさせてください。私は貧しいですが、足ることを知り、あなたをあがめ得ますように。私は病気です。しかし忍耐してあなたをたたえ得ますように。主よ、私には時間があります。この時間をあなたのために用い、あなたに仕えることができますように。

主よ、私には心があって感じる事が出来ます。どうかあなたに対してのみ愛を感じ、その愛のみを燃やす事が出来ますように。・・・

主よ、あなたは何事かをなさせるために私をこの世に置かれました。主よ、それが何であるか示してください。私はその生涯の目的を達し得るよう助けてください。私は多くをなし得ません。しかし生活費のすべてなるレプタ二つを献げたやもめのように私の時と永遠をあなたの倉にささげます。私のすべてのものはあなたのものです。今私を用い、語る所なす所、持てるすべてによって、栄光をあなたに帰さしめてください。」

2月16日

私はどんな境遇にあっても、足ることを学んだ。

(ピリピ 4・11)

この言葉によって、私たちには足ることを知ることが決して生まれつきの性質ではないことがわかる。「雑草は早くのびる。」むさぼり、不平、つぶやきなどは、地にいばらがあるように、人間が生れながら持っているものである。…

さて、足ることを知るのは天国の花の一つである。そしてもし私たちがそれを得ようとするなら、育てなければならない。それは、私たちのうちに自然に生えることはない。生まれ変わった新しい心の畑にのみそれは生えるのであって、神がまかれた恵みを受け、それを育てるためには特別の注意が必要である。

パウロが「私は足ることを学んだ」と言っているのは、彼が以前にはそれを知らなかったことを意味している。彼がこの大真理の奥義に達するまでには相当な苦しみを経験したのであった。たしかに彼はある時はそれを知ったと思って、また失敗した事であろう。そしてついに彼がその奥義に達し、「私はどんな境遇にあっても、足ることを学んだ」と言い得るようになったとき、彼は白髪の老人となって墓場のかたわらに立っており、ローマにあるネロの牢獄につながれたあわれな囚人であった。

私たちもパウロの信仰の程度にまで達する事ができるなら、喜んでパウロの持病を持ち、彼と共に寒い牢獄で暮らすだろう。学ばずして足ることを知り得ると思ったり、訓練なしに学べるというような安易な考えを持ってはならぬ。それは持ち前の力ではなく、訓練によって少しずつ得られる技術である。私たちは経験によってそのことを知る。

兄弟よ、あなたがつぶやくのは無理もないが、つぶやきをやめて足ることを学ぶ大学の勤勉な学生であれ。

2月19日

主なる神はこういわれる、イスラエルの家は、私が次のことを彼らのためにするように、私に求めるべきである。

(エゼキエル 36・37)

祈りはいつくしみの先駆者である。聖書に記された歴史を考えてみよ。大きないつくしみが祈りの前ぶれなしにこの世に来たことはないとわかるであろう。あなたはあなたの個人的な経験に照らして、これが真実であることを知るだろう。神は、あなたが求めないのに大きな恩恵を与えられた。しかし、それでもやはり大きな祈りはあなたに対するいつくしみの序曲である。あなたが十字架の血によって始めて平和を得たときは、あなたは多く祈って、あなたの疑惑を取り去り、苦悩から救ってくださるように神に嘆願していた時であった。あなたの確信は祈りの結果である。いつであろうと、あなたが非常に大きな喜びを経験したときには、それが必ず祈りの結果であったことに気づくであろう。あなたが非常な困難、大いなる危険の中から救い出されたとき、あなたは「私が求めたとき、主は私に答え、すべての恐れから私を助け出された」と言うことができた。祈りはいつでも祝福の端緒である。祝福の影として祝福の前に来るものである。…

祈りはわたしたちの受ける祝福をダイヤモンドより尊いものとする。私たちの求めるものは尊いものであるが、熱心に求めるのでなければその尊さを知らないのである。

2月20日

打ちしおれている者を慰める神（第2コリント 7・6）

かわいそうなクリスチャンよ、あなたは失望して座り込んでいる必要はない。慰め主のところへ行き、彼に慰めを求めよ。あなたはあわれな乾いた井戸である。ポンプが渴いているときには、まず水をそそぎいれよ。そうすれば水を揚げる事が出来るとあなたは聞いたであろう。

主にある友よ、そのように、あなたが渴いているときには、神のみもとに行き、その喜びをあなたの心にそそぎ入れられるように求めよ。そうすればあなたの喜びは溢れるだろう。地上の友のもとに行くな。あなたはせいぜいヨブの慰め手を得るだけだろう。

まず第1に「打ちしおれている者を慰める神」に行け。そうすれば「私のうちに思い煩いの満ちるとき、あなたの慰めはわが魂を喜ばせます」と言うことができよう。

2月21日

主は「わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と
言われた。（ヘブル 13・5）

もし私たちが信仰によってこれらの言葉を把握しておりさえすれば、私たちはあらゆるものを征服する武器を持っていることになる。…どのような恐怖も、神の約束の弓から来るこの矢によって射止められないものはない。人生の苦難と死の苦痛、内なる邪念と外なるわな、上より来る試みと下より来る誘惑、これらは私たちが「主は言われた」という砦の中に閉じこもっているならば、言うに足りないほどの軽い悩みである。しかし私たちが静かな喜びに満たされている時、また戦いに力を要する時、この「主は言われた」という御言葉は、私たちの日々の避けどころでなければならない。そしてこれが、私たちに聖書を研究する事が極めて必要なことを教えてくれる。…

聖書の中には、靈薬の処方箋があるが、あなたがそれを研究し、「主は言われた」とあるのを発見しないから、あなたの病はいやされない。

あなたは聖書を読むだけでなく、あなたの記憶の中に神の約束を豊かにたくわえておくべきではないだろうか。

あなたは偉人の言葉を記憶し、有名な詩人の詩歌を暗誦しているが、神の御言葉をたくわえて、難問や疑惑をたちどころに解決すべきではないか。

「主は言われた。」これは全ての知恵の源であり、あらゆる慰めの湧き出る泉である。それをあなたの中に豊かに住まわせて「永遠の命に至る水がわきあがる泉」とせよ。そうすれば、あなたは神のいのちの中に、健康で力強く、幸福に育つことができる。

2月23日

私は、決してあなたを離れない。（ヘブル 13・5）

約束はすべて個人的に解釈すべきではない。神が誰か一人の聖徒に語られたことは、すべてのものに語られたのである。神がある者のために泉を開かれたならば、それはすべてのものに飲ませるためである。神が穀倉を開いて与えられる時には、だれか一人の飢えた者のためである事もあるが、すべての飢えている聖徒は来てそれを食べる事ができる。

主にある友よ、神がアブラハムに語られたか、モーセに語られたかは問題でない。神は約束を受けたものの末流であるあなたに、それを与えられた。…大胆に信ぜよ。なぜなら、主が「私は、決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われたからである。…

神の徳のうち、私たちに与えられないというものはないのである。神は全能であるか。神はご自身を信頼する者のためにその力を現される。神は愛であるか。さらば神はその慈しみをもって私たちをあわれまれる。神の性質を形成している種々の徳は、ことごとく私たちのために傾けられるのである。

一言にして言えば、あなたの欠乏、あなたの要求、あなたが一時的にまた永久的に要するもの、生きているもの、死んでいるもの、この世のもの、次の世のもの、現在のもの、復活の朝のもの、また天上にあるものもこの聖句「私は、決してあなたを離れず、あなたを捨てない」の中に含まれていないものは一つもないのである。